

侵略的日本語教育と国際交流のための日本語 ②

日韓併合後の国語教育

関正昭(『日本語教育史研究序説』150頁)によると、日韓併合後に朝鮮総督府ができ、「国語」としての教育が始まったが、教授法も対訳法から直接法に変わったようだ。教科書も皇民化のために内容も皇室・神道関連の題材も多く取り上げられた。台湾でグアン式教授法(直接法)を導入し成果を取めた山口喜一郎が1910年に朝鮮に渡り、教授法の面で指導的な役割を果たし、国語教育者の芦田恵之助が教科書を編纂した。その編纂の経緯の中で、芦田は、「朝鮮学童の国語を学習するのに便利なものでなければなりません。しかし、その内容が民族意識を高めて、その幸福を将来するものでなければならぬと思いました。(中略)私が朝鮮読本に何をねらったかを明らかにしておきます。率直に言えば、この読本によって、平和を翹望する民族たらしめたいと考えたのです。」と述べている。平和を待ち望む民族になることを望み、教科書の編纂に携わっていたのに、植民地政策が進んでいったことは皮肉なことであると思う。現代でも日本語教育に携わる者は、芦田と同じ思いを持っているのではないだろうか。

筆者は1983年にソウルの光化門前で写真を撮ったが、後ろに写っているのが旧朝鮮総督府の建物である。朝鮮王宮の敷地



旧朝鮮総督府前で(左側筆者)

の中に建てられたものであるが、韓国では歴史的な屈辱の象徴とも言われている建物である。国立中央博物館として利用されていたが、1995年

に取り壊されている。韓国の世論でも残しておくべきだ、取り壊すべきだと様々な意見があったように記憶しているが、現地の人々には複雑な思いがあったと思う。この写真を見るたびにいろいろ考えさせられる。

日本語教育と歴史観

言葉が大切なことは自明のことだが、世界の歴史を振り返ってみると、侵略と征服の歴史ではないのかとも思えてくる。西欧の国々は近代文明を利用し、どんどん海外へ進出しアジアの国へも来ていた。そして言葉も自国語に変えていこうとした。植民地主義の中で言葉に関する政策も行なってきたわけだが、自文化の言葉がより優れているとか、植民地化する上で必要だとか、さまざまな理由で言語政策が行なわれ、思考の元である言語を自分たちの言語に置き換えてきたことは誰もが知るところである。そのことを、進んだ文明を伝え、援助しているのだとみるのか、自国の利益のための侵略だとみるのか、歴史は様々な見方があるようにも感じる。個々の事例を取り上げて、それぞれ主張を正当化することも多いように感じる。植民地主義が進むとピジン(現地語と混合した言語)、クレオール(ピジンが現地で母語となったもの)などの問題も生れてくる。親子ならまだしも、祖父母とはもはや話が通じないという例も世界にはある。日本はアジアの国々が西欧の国に植民地化され、搾取されていくのを防止し、これらの国々を助けたという見方もあれば、皇民化

のためにアジアの国々に日本語が強制されたという見方もあるだろう。最近では自虐史観を見直そうという動きもあるようだが、偏り過ぎていけないのではないだろうか。

歴史観の構築

具体的な例として伊藤博文と安重根の話を挙げることにする。簡単に言えば「暗殺者」か「国を救おうとした義士」なのかという例だが、二者択一で「正か悪か」というような単純な話ではないように感じている。研究が進むにつれて、旅順監獄看守として安重根の監視担当であった千葉十七のことなど、きわめて人間的な話も出て来る。安重根の唱える「東洋平和論」は、日本の欧米列強のアジア進出に対する「大東亜共栄圏」構想に通ずるものがある。彼自身は熱心なカトリック信者であり、東洋の平和を祈り、韓国の独立を願っていた人物である。決して日本を敵視していたわけではない。初代の韓国統監を務めた伊藤博文もまた、韓国を保護国とするのは韓国の国力がつくまでで、併合という考えには否定的だったとも言われている。研究が進んで新しい事実が明らかになると歴史観は変わってくるものであり、筆者は韓国に関することを調べてきて経験的にそう感じている。物事が客観的に見られるようになるには時間がかかるものなのかもしれない。それゆえ「正しい歴史」というのは存在せず、ただ「歴史的事実」があるだけに過ぎないのかもしれない。

日本語教師の歴史観

一般的に日本語教師は日本語教育史についても学ぶわけだが、アジアや南洋諸島での日本の統治の中で行われた日本語教育が負の歴史のように捉えられ、自虐的な歴史観を持たされるような印象もあることは否めない。筆者は、歴史というのは事実が一つでも、立場や考え方によって見方も変わり、伝わり方も変わってくるものだと思っている。どこの国でも歴史の教科書は執筆人や国家の歴史観が関係し、その下で記述されているように思う。だからこそ、一つひとつの事例について学んだあとに、さらに深く研究していく必要がある。そして、研究して出てきた事例から新たな歴史観を構築していき、平和へとつながる教育を実践していくことが大切ではないだろうか。

天理教が海外に展開している日本語教育の根底には、間違いなく教祖中山みきの教えがもとになっていると言える。原典の一つである「おふでさき」に次の歌がある。

このよふを初た神の事ならば
せかい一れつみなわがかなり (四 62)

せかいぢういちれつわみなぎよたいや
たにんとゆうわさらにないぞや (一三 43)

たとえ国や民族が異なっても、世界中の人間は皆、神の子であり「いちれつ兄弟」である。互いに立て合い、助け合って、「陽気ぐらし」をすることが、親神おぼしめしの思召であり、天理教の目指すところである。本誌2019年第2号(通巻230号)で人材育成について述べたが、海外へ派遣する人材は自前で育成していかなければならないという理由がここにある。教えを心に修め、歴史をしっかりと見据え、その上で「陽気ぐらし」をどのように実現に導いていけるのかを自分で考えられる人材でなければ、天理教の日本語教師は務まらないからである。